

Feature

ESD重点校形成事業 サステイナブルスクールに指定！

2016年9月、文部科学省と公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が主催する『ESD重点校形成事業』において、サステイナブルスクールに選ばれました。教育現場におけるESD(Education for Sustainable Development:持続可能な開発のための教育)の“モデル校”として、活動のさらなる拡充を図り、特色あふれる取り組みを発信していきます。

カーボン・オフセットを通じて企業と連携

本校がサステイナブルスクールに指定された『ESD重点校形成事業』は、魅力的なESD(持続可能な開発のための教育)を実践する学校の支援を目的とした、文部科学省とユネスコ・アジア文化センター(ACCU)のパートナーシップ事業。全国から選ばれた24校のサステイナブルスクールには、それぞれの取り組みを通じてESDの理念を普及させる役割があり、本校がスーパーグローバル・ハイスクール(SGH)アソシエイトやユネスコスクールとして、地域・企業・大学と積極的に外部連携を展開していることが評価された結果だといえます。

なかでもカーボン・オフセットへの取り組みは、特色あふれる活動として注目されています。カーボン・オフセットとは、生活の中で削減しきれないCO₂排出量を、他の方法によって埋め合わせ(オフセット)する制度。本校ではSGHアソシエイト活動の一環として全校生徒がその仕組みを学び、企業を招いた



▲講師を招きカーボン・オフセットの仕組みを学習。



▲内田湧大君(国際教養科2年生)

勉強会も実施しています。さらに今年度は、フェアトレード商品を企画・販売する課外活動の中で、生徒が自発的にカーボン・オフセットの視点を取り入れた『Kokusai friend tea』を製作。商品の製作過程で排出されるCO₂量を計算し、排出量をオフセットするため、実際に植林によるCO₂吸収・削減プロジェクトへの投資を行うなど、カーボン・オフセット制度を実体験しました。

「CO₂の排出量が具体的な数値になることで、環境にかかる負担の大きさを実感しました。フェアトレードという“価値ある活動”も、視点を変えればマイナスに作用してしまうことを知り、多方向からものごとを考えることが大切だと思いました」と話すのは内田湧大君。普段はあまり意識していない“小さな行動”が、巡り巡って地球環境に大きな影響を与える可能性を知り、生徒たちの意識も大きく変化しているようです。❏

サステイナブルスクールとは

教育を通じて持続可能な未来を構築するため、実践的な取り組みを行う意欲のある学校をESD重点校(サステイナブルスクール)に指定。全国から24校が選ばれ、さまざまな支援のもとで活動を発展させ、ESD普及の一翼を担うことが期待されている。

活動内容を発信してESDの普及に貢献

『Kokusai friend tea』の製作で最初に取り組んだのは、自分たちの周りにあるカーボン・オフセット商品を探すこと。ところが、思うように商品を見つけることができず、生徒たちは制度の認知不足を痛感。同時に「自分たちの手でたくさんの人に伝えていこう!」と意欲を高めました。とくに河邊陽之君は、カーボン・オフセットのコンサルティングを行う企業を訪問し、積極的に理解を深めました。「丁寧に調べていくと、森林の整備やLED照明への切り替えなど、いろいろな取り組みが行われていました。自分が身に付けた知識を、たくさんの人に紹介していきたいです」と目を輝かせる河邊君。9月に開催された文化祭では、来場者に対してカーボン・オフ



▲河邊陽之君(中高一貫3年生)



▲成田恵さん(国際教養科1年生)

セットの仕組みを熱心に説明。商品も売となり、大きな充実感とやりがいを感じたそうです。

また、「これからは学校の中にとどまらず、いろいろな人との交流を通して、活動のフィールドを広げていきたいです」と新たな目標を掲げたのは成田恵さん。その言葉から伝わってくるモチベーションは、サステイナブルスクールに期待されている資質そのもの。藤井新次郎先生も、「本校では①社会、②環境、③経済という3つの視点から多彩なESDを実践しており、一つひとつの活動を、生徒が主体的に結びつけることで、幅広い視野を磨いています。『Kokusai friend tea』はその具現例。サステイナブルスクールとして人と情報の交流が活発になる今後は、地域や企業、国際社会とのつながりを視野に入れて活動の質を高め、サステイナブルスクールとしてESDの普及に貢献していきたいです」と笑顔を見せます。❏

内藤先生、社会人ESDユースレポーターに選出。



環境省ESD活動支援センターより「社会人ESDユースレポーター」に選出されました。ESDはEducation for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)の略で、私の役割は、地域でESD活動実践を全国に伝えることです。全国で9名が選出され、私は中部地区の代表です。本校のSGH活動で関わりのある愛知県内の企業・団体の活動からレポートしようと考えています。

また、2016年12月2日に金沢大学にて第8回ユネスコスクール全国大会が開催され、本校の取り組みを発表しました。SIA特論、国際理解研修、フェアトレード活動を中心に発表し、50名を超える参加者に本校の活動を知っていただくことができました。これら2つの活動の中心は生徒である皆さんひとりです。本校がユネスコスクールに認定されて2年が経ちましたが、サステイナビリティを意識した学びに終わりはありません。全校で高まりを見せる2017年の活動に期待します。(英語科 内藤圭祐)❏

黒宮先生、西アフリカ セネガル共和国での研修会に参加。



11月21日～23日にかけて、ユネスコの『気候変動に対するトレーナー研修』がセネガル共和国で開催され、黒宮祥男先生が日本のサステイナブルスクールを代表し、スクール・ファシリテーター研修に参加しました。『ユネスコ気候変動プロジェクト』は、学校

全体として気候変動のリスク低減に取り組み、その過程で生徒が積極的な役割を果たすことを目的としたプロジェクト。3日間の研修を通じて世界各国の代表者とディスカッションやロールプレイングを重ね、課題意識を共有した黒宮先生は、「やりがいとともに大きな責任を感じています。プロジェクトテーマである気候変動の視点だけにとらわれることなく、活動を通じて得た知識をさまざまな形で学校に還元し、生徒の学びの助けにしたいと思います」と抱負を語ってくれました。❏



THE FRONTIER TIMES

Report

注目を浴びるIBDPの導入 世界水準のアプローチで 世界に挑む力を養う

「自ら考え、自ら行動して、世界と日本の未来を切り拓くグローバルリーダーを育てる」

2016年11月30日、朝日新聞社メディアビジネス局から国際バカロレア・ディプロマプログラム(IBDP)認定校として名古屋国際中学校・高等学校が取材を受けました。男女共学の私立中高一貫校として2003年に創立以来、世界水準の国際教育を実践している本校が推進する国際バカロレア・ディプロマプログラムは、世界に挑む力を養う独自の学習プログラムであり、国内外の教育機関からも高い評価を得ています。その優れたプログラム内容について、IBDPの授業を受け持つ片山寿弘教頭、武藤浩司教頭、ジョナタス・カパーニIBコーディネーターの3名が、本校の先進的な国際教育の取り組みを説明しました。ここで取材の内容について一部を紹介します。



くのを実感しています。生涯にわたって、音楽を楽しむための基礎力を養うことを目標にしています。

片山教頭

IBDPの学習は、教員の黒板を書き写すだけの授業ではありません。生徒が自ら課題を設定し、プレゼンテーションやグループディスカッションなどを通じて、答えや解決策を見いだしていくのが基本です。IBDPではすべての授業を英語(またはフランス語、スペイン語)で行うことを原則としています。生徒が自ら一部の科目に限り、日本語でも可能になりました。しかし本学は全教科を英語で実施する形式を堅持しています。なぜなら海外の大学で求められるのは、英語で学習する力に他ならないからです。特に、英語による思考力や表現力を高める必要があります。来年度以降は理系科目を増やすなど、カリキュラムの拡充も図る予定です。また、IBの普及・拡大にも貢献したいと考えています。国内ではまだまだIBを指導できる教員が限られていることから、本校でのワークショップ開催などを検討しています。



▲朝日新聞社メディアビジネス局の記者から取材を受ける本校IBDP教員。



▲アクティブラーニングラボ1で授業を受けるIBDP履修生。

限りない探究心こそ、若さの特権 失敗をおそれず世界にチャレンジ

取材担当者

では国際人になるためには、何が必要なのか。若い世代へメッセージをお願いします。

ジョナタス先生

語学力はもちろんですが、異文化に対する理解と尊重も必要です。国際バカロレアの学習者像にも「Inquirers(探究する人)」「Principled(信念を持つ人)」「Caring(思いやるのある人)」などが示されていますが、中でも私が重要視しているのが「Risk-takers(挑戦する人)」です。あえて難しい道を進み、自らを鍛えること。常に高い志を探究心を持ち続け、失敗を恐れず、世界にチャレンジして欲しいと思います。

武藤教頭

グローバルリーダーを目指すには、「世界を知る」がキーワードになり

ます。感受性の豊かな若い時期に、他国に目を向けて体感する経験は有意義であり、得るものも大きいはずです。本校のスクールポリシーでもある「開拓者精神(フロンティア・スピリット)」は好きな言葉のひとつですが、とにかくチャレンジあるのみ。どんどん日本を飛び出して、広い世界を見て感じてください。

片山教頭

国際人には、「Critical thinking」も不可欠だと思います。直訳すれば批判的思考ですが、情報や人の意見を鵜呑みにせず、自分で吟味して判断することを意味します。時には意見を述べ、論じ合うことも必要でしょう。ただ一方で自分の説に固執し、狭い世界に閉じこもってしまうと人間的な成長が期待できません。まずは思考を柔軟にして、世界全体を見渡す視点を磨いてほしいと願っています。❏

2016年12月15日付
朝日新聞朝刊一部抜粋

過去5年間(2013～2017)の大学合格実績

分類	合格大学	THE*	国際認証*	SGU*
海外	The University of Queensland(豪州)	60位	-	-
海外	University of Birmingham(英国)	130位	-	-
国立	名古屋大学	301-350	-	タイプA
国立	筑波大学	401-500	-	タイプA
海外	Chung-ang University(韓国)	401-500	-	-
私立	慶應義塾大学	601-800	○	タイプA
私立	早稲田大学	601-800	-	タイプA
国立	名古屋工業大学	601-800	-	-
公立	名古屋市立大学	601-800	-	-
私立	東京理科大学	601-800	-	-
私立	近畿大学	601-800	-	-
私立	上智大学	801+	-	タイプB
私立	法政大学	801+	-	タイプB
私立	明治大学	801+	-	タイプB
私立	立命館大学	801+	-	タイプB
私立	関西学院大学	801+	-	タイプB
私立	立命館アジア太平洋大学	-	○	タイプB
私立	同志社大学	801+	-	-
私立	関西大学	801+	-	-
私立	名古屋商科大学	-	○	-
国立	東京藝術大学	-	-	タイプB
公立	国際教養大学	-	-	タイプB
私立	立教大学	-	-	タイプB
海外	Wyoming University(米国)	-	-	-
海外	University of Nebraska Omaha(米国)	-	-	-

2017.12.7現在

*1:THE(The Times Higher Educationの略)
イギリスのタイムズが発行している高等教育情報誌であり、世界大学ランキングを毎年公表している。評価項目には外国人教員の比率や外国人学生比率が含まれており、大学の国際性を重視した世界ランキング。

*2:国際認証
高等教育の質を評価するための世界的な評価機関による認証を受けている国内の大学。
*3:SGU(スーパーグローバル大学)の略
海外大学との連携などを通じて、徹底した国際化を進めて、世界レベルの教育研究を行う大学を重点的に支援するために2014年(平成26年)に文部科学省が創設した事業の名称。SGU-B(グローバル化率引型):これまでの実績を基に新たな取り組みに挑戦し、日本のグローバル化を牽引する大学
SGUタイプA(トップ型)
世界大学ランキングのトップ100を狙う実力がある世界レベルの研究を行う大学
SGUタイプB(グローバル化率引型)
これまでの実績を基に新たな取り組みに挑戦し、日本のグローバル化を牽引する大学